

幼児の素朴概念と描画表現における空間表現の特異性との関係考察

大阪芸術大学短期大学部 保育学科 教授 山本 泰三

1) 背景と知見、問題定義

描画を扱った心理学研究の多くは、乳幼児期から青年期に至るまでの特徴の偏移について、それらを統一的な発達理論をそこに構築する、といった営みと捉えられる。これまでの描画の発達研究においてはLuquet(1927)を嚆矢とした描画発達段階論が極めて大きな影響を持ち続けてきた(Nixon & Adwinkle, 2005)。

特に、幼児期後期から児童期始めにかけての子どもの描画表現を、「知的リアリズム(intellectual realism)」から「視覚的リアリズム(visual realism)」への移行として特徴づける視座は、美術教育の実践において根強く定着している。5～7歳は、対象について知っていることを描き、実際には見えていない要素まで絵に描き込む。こうした、描画特性をLuquet(1927)は見えた通りに描く大人の「視覚的リアリズム」に対し、子どもの「知的リアリズム」とする。この「知的リアリズム」の段階において描画は、子どもの心的イメージの反映、つまり実物の写しではなく「心のなかで変形され、複雑な再考性の過程を経た創造的な産物」としての内的モデルの存在によって成り立つと捉えられる(Piaget, 1956)。Arnheimは、視覚的思考という概念を提示し、知覚の基本過程は、単なる受動的な記録ではなく構造を把握する行為であるという。

以上の概念考察研究に対して、実空間認知からのアプローチとして、空間的視点取得研究については、代表的な「3つの山問題」(Piaget & Inhelder, 1948, p.213)で、観察方法にこそ課題はあったが現象的な意味で用いる「自己中心性」(Piaget & Inhelder)つまり「自己視点固執」が示唆されマインド・ローテーション問題が意識された。また、未熟な空間体験概念で構築されている素朴概念に関しては、その裏付けとなっている経験に匹敵するような、子どもが納得できる新たな経験的裏付けの提供があればピアジェ(1965)がいうような操作の群生体構造の成立も可能である(小野寺)と言う。

2) 目的

上記の幼児の空間認知の2アプローチ間(幼児の認知概念の観念論・実証検証を通しての認知発達)における関連を見出し、保育における方法技術の一対象理解の知見を明らかにすることを目的とした。

・幼児の空間認知のアプローチについて、既存の幼児の認知概念の観念論方略を実証検証を通じた認知発達の方略から再確認し、新しい幼児理解方略を探る事。

・ともすれば観念論になりがちな描画理解を学生教材として発達の根拠が提示できる可能性を探る事。

3) 方法

(1) (実験計画立案) 調査に効果的な描画資料として、対象年齢毎のテーマや描画材などを検討する。

また、保育運営に支障の無いよう、実施時期設定のため対象園の年間カリキュラムを調査する。

(2) (実験依頼) 教育機関、保育施設を巡り、園の保育理念を考慮して取材協力園を探索する。対象園は、年齢別クラス構成の園から選定し依頼する。

(3) (インフォームドコンセント) 取材協力者、所属機関・施設に

研究目的を説明し、交渉、同意獲得し、コンプライアンスの説明、記録の管理方法などの解説をする。

(4) (環境構成) 現地に出向き、撮影録音に適した音響的環境を確保でき、また対象児の撮影及び、個別の製作記録内容が連続性を持ち、偏りが無いよう、具体的な保育場面を想定し、教職員と事前準備や打ち合わせリハーサルを行う。同時に、事後の分析時の識別の為、背景や撮影画角の中の什器に常時識別番号や位置記号を貼付けて映り込む様にする。

日常の保育場面を事前録音撮影し、検討後、環境を考慮し什器、機器等の構成を再構築し、問題発生の可能性があれば再製作、調達しておく。

(5) (調査実施) 調査実験用の実験記録機材等を搬入し、依頼園にて順次取材録音撮影を実施する。

保育活動の取材では、製作後の作品の記録のみでなく、保育状況の記録も行う。一つは保育士が保育を行っている発声をマイクで音声記録したもの、一つは子ども達の活動を複数台のビデオカメラで対象児の上方から画面の詳細が最低限分かる画角で録画する。

(6) (データベース化) 保育者の発話内容や複数の対象者の発話内容及び製作画像とを同期させる為に、時間軸を揃えて一元化する。項目は時刻、保育者・園児発話内容、操作、園児間操作情報コミュニケーション、等。

(7) (分析) 個々の描画の表象パターンを、各カテゴリー(認知概念・素朴概念・マインドローテーション)の複数の知見の理解方略の共通項を探る。

(8) (評価) 幼児に見られる特徴的な描画表現パターン of 表出根拠の為の概念的・実証的アプローチの再構築の可能性を探る。

4) 結果の概要、及び考察

2歳児・3歳児クラスにおいて、複数クラスで同時に長期間継続して行った結果では、対象児の「先生」表現の表象変化が、保育士の胴体にキャラクター人形をつける事による存在の意識づけによって、命名期の特徴的な「もの」の存在を象徴する「マーキング記号(閉じた形である一筆書きの円型)」から、「頭足人」表現を経て、「胴体・手足」記号の追加発生に至る一連の流れを加速することがわかった。このことは、(小野寺)の言う、「未熟な空間体験概念で構築されている素朴概念に関しては、その裏付けとなっている経験に匹敵するような、子どもが納得できる新たな経験的裏付けの提供があれば、ピアジェ(1965)のいう操作の群生体構造の成立が可能になる」とこと考えられた。しかし、この場合は、単に存在を象徴する「マーキング記号(閉じた形である一筆書きの円型)」の獲得過程における認識構造、つまり「心のなかで変形され、複雑な再考性の過程を経た創造的な産物」としての内的モデルの存在によって成り立つと捉えられる(Piaget, 1956)ものではなく、発達初期の五感体験の融合からくる総合的な概念形成による「人間関係」的動機付けによるものであり、「未熟な空間体験概念で構築されている素朴概念」としての初期設定に置くことは慎重になるべきと考えられた。